

「第30回日本医学会総会2019中部」にて愛知県歯・内堀典保会長が特別講演

4月27日(土)～29日(月・祝)の3日間、名古屋国際会議場他3会場において愛知県で24年ぶりに「第30回日本医学会総会2019中部」“医学と医療の深化と広がり～健康長寿社会の実現をめざして～”が開催された。全国から約3万人近い医療関係者が集まったイベントで、開催2日目の28日(日)14時から、内堀典保愛知県歯科医師会会長が「ウエルネス8020～フレイル・ロコモ・認知症対策～」の演題にて特別講演を行った(写真)。医学会総会120年の歴史の中で初めて歯科医師会の会員が特別講演を行い、520名が聴講できる白鳥ホールと200名収容のサテライト会場が満席で立ち見が出るほどの大盛況となり、歯科医師だけでなく多くの医科の先生方の聴講が見受け

られた。

当日は堀 憲郎日本歯科医師会会長と二人で講演する予定であったが、上越新幹線が停電した影響で堀会長が参加できなくなり、急遽内堀会長一人での講演となった。その中で、昨年度愛知県歯科医師会が県下の東浦町において、平成30年度老人保健事業推進費等補助金による老人保健健康増進等事業「歯科検診と事後フォローによる高齢者の自立支援と重症化予防への検証及び口腔機能の維持と栄養・運動を含めた総合プログラム検証事業」として調査研究を行った結果についても発表した。そして、今後認知症によって要介護者が増えることが予想されるが、オー



ラルフレイルへの取り組み方等について更に、しかも早期に医科歯科連携が進んでいくことがオーラルフレイル予防になる。この“オーラルフレイル予防がフレイル・ロコモ・認知症予防に有効である”というエビデンスが検証され、それにより認知症、要介護者を防ぐことができれば、健康寿命の延伸する社会となるであろう、と強く結んだ。

「身体ことば」を生んだ日本人の体感覚を呼び起こす (ICD 日本部会)

長い歴史のあるICD(International College of Dentists: 国際歯科学士会)の日本部会(宮崎 隆会長)は6月8日、東京・飯田橋のホテルメトロポリタンエドモンドにおいて2019年度(第62回)総会・認証式ほかを開催した。

本年は例年にない多くの新フェロー(23名)が誕生したが、認証式ではフェロー選考の経過報告の後に、“Key, 認証状, 綱領, バッジ”が授与され、宮崎会長と千田 彰次期国際会長(2020年に就任)から「ICD会員として、どうあるべきか」について訓示がなされた。宮崎氏は“1920年に横浜で、ICD創設の萌芽となるOttofyと奥村鶴吉の話し合いがもたれた歴史や2020年に100周年を迎え11月に記念事業が名古屋市

で開かれる”ことも紹介し、千田氏は、Bettie McKaig(米)現国際会長がヨーロッパ部会に出席しており送られてきたメッセージを紹介しながら、共に心構えを述べた。

また、韓国部会、台湾部会、日本部会の3者で姉妹関係を結ぶ調印も行われ、3部会は従来以上に連携を密にすることを確認したが、海外からの来賓は韓国部会会長のDr. Kyung Sun Kim 他、台湾部会会長のYing-Kwei Tseng 他であった。

恒例の特別講演は山梨学院大学教授のWilliam Reed氏(アメリカ出身)による「日本文化に刻み込まれた『身体ことば』という宝物」で、“日本人は昔から身体で考える感性が豊かだったが、デジタルコミュニケーションやAIが進む中でこれが鈍る



傾向にある”として、例えば「手」や「目」が付くことばなどさまざまな例を挙げ、日本人の体感覚を呼び起こした(写真)。同氏は書道十段、合気道八段で、著書も多数ある。

ICDの全世界の会員は13,400人ほどだが、会員数が最も多いのはアメリカ、次いでカナダ、オーストラリアで、日本部会は300人ほどで7位となっているものの、近年は若いフェローが増えているようだ。